

書 評

## 「AIと哲学」

スティーブ・トランス著  
井上陽一郎 監訳評者 武藤 浄\*  
Kiyoshi Taketo

本書は、1984年4月ロンドンにおいて「心と機械」という題目のもとに開催された「第2回英仏哲学コロキウム」の論文を再編したものである。人工知能(Artificial Intelligence, AI)の研究と応用が始ったばかりであり、編者は、これを序文をもたない書物の文化だと表現している。本書は、AIが今後どのような発展の経緯をたどるにせよ、哲学との相互交流を抜きにしては有意義なものにはなり得ないだろうということを用意したように思われる。

本書は、全体が15章で構成されており、前半は主に、現在の心の哲学における主要な論争点に関連する問題を扱っており、哲学者が中心に議論を進めている。一方、後半の各論文は、コンピュータサイエンスとAIの領域内の研究が課題となっている。

第一章(スローマン)は、心をもつということがいかなることであるかということに関して、コンピュータおよび哲学の両方の観点から見解を出している。第2章(パーマー)は、哲学者デネットが提唱している小人の概念を利用する機能主義の問題に関して、志向性という考え方から扱い、機能主義やAI支持の主張に対して批判を加えている。第3章(アンジェル)は、機能主義をはじめとする多岐にわたる問題を論じているが、とくに信念という概念の分析に焦点を当てている。第4章(ジャコブ)は、我々の心の内容を説明する際に、何らかの内的な「思考の言語」が重要な役割を果たしているという哲学者フォードの見解に関し議論を行っている。第5章(ナラヤナン)は、心の概念に対するAIの接近法についての議論を試み、コンピュータであるということはこういうことであるというようなことからは何も存在しないという趣旨の主張を行っている。第6章(ムールー)は、機能主義にかかわる哲学的問題を全般的に検討している。第7章(テ

ィールスラン)は、C. S. パースの見解を考察して、機械と心に関する現代の見解の先がけとなる指摘がそこに存在することを示している。第8章(ヒギンボザム)は、AIの研究および認知科学において重要な影響を与えて来たチョムスキーの言語理論に関し、これから発生する哲学的、方法論的問題をレビューし検討している。以上が哲学的な側面の検討を主題としており、相当に難解である。

第9章(ボーデン)は、AIの研究がその他の分野、経験的心理学、論理学、認識論、教育に対して貢献する可能性について論じている。第10章(エナルズ、ブリッグズ)は、論理型プログラミングという分野における最近の展開をレビューし検討している。第11章(シュラキ)は、論理と計算モデルの関係を論じている。特にAIとコンピュータサイエンスにおける最近の研究によって、人間の推論現象に対して現実的な説明が可能となった点を示している。第12章(バンディ)は、知的に方程式を解くシステムを作る際のメタレベルの推論についての研究と意識に関する議論を結びつけて検討している。第13章(カイザー)は、コンピュータサイエンティストの立場から、意味という概念は、推論という概念と関連させることによって究められるという提案を行っている。第14章(ヤズダニ)は、人間の創造性と機械における創造性について報告し、プログラムでなく、それを作るプログラマーの側に創造性があると強調する。第15章(コドラトフ、ガナシヤ)は、単純な学習過程を含む一つのアルゴリズムについて論じ、このアルゴリズムによる個別的な記述からの一般化が可能となることを主張している。

最近、AIの一分野であるエキスパート・システムが利用の段階に入りつつあり、鉱床の探査などに成功を収めている。本書は、さらに高度の知能創造システムをめざす際の原点として哲学との関連を強調する。

\* 三菱電機(株)中研エネルギー研究部第5グループマネージャー  
〒661 尼崎市塚口本町8-1-1